
あの部屋は

真島 夏佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの部屋は

【Nコード】

N9532P

【作者名】

真島 夏佳

【あらすじ】

これは中2の夏佳と中1のともきという男子の恋愛物語(?)です。

最後の展開がとっても意外です。

今日もかわらず中学校の昼休み皆がギャーギャー騒ぎながら遊んでいる。

わたしはなんだかあのテンションについていけそうにない。女子はもっと大人しくガールズトークでもしていればいいのに。

そう思うわたしは今日も校舎内をブラブラしている。

そしてわたしは気が付くと屋上の入り口の扉の前に立っていた。ふと横を見ると一つの扉がある。

そういえばここ初めて来たな……。

こんなところに何の部屋だろ？

少しドキドキしながら扉を開けるとそこには……掃除道具、机、棚、椅子、窓、それから……男の子……

えっ？

男の子？いったい誰？

わたしは部屋に入りその男の子を一直線に見つめながら近づいていた。
った。

男の子の目の前に立った。

その子は何もしゃべらずにわたしを見ている。

わたしはその子に話し掛けてみた。

「あの……、えっと……なん年生ですか？」

「えっ？……1年だけど」

その子はわたしより少し背が高く自然な茶髪のしつかりとした顔立ちの子だった。

「1年生か、あたしは2年生。 2 - Aの真島 夏佳！」

「そうなんだ、俺は1 - Aの山田 ともき」

「よろしくね！」

「よろしく」

「もう君が入学してきて1年もたつのに初めてみたよ」

「そうだと思うよ。俺あんまり学校来てないし・・・」

「そう・・・なんだ・・・」

「ねえ、なんでこんなところにいるの？ なんか薄暗いし寒くない？ 真冬なのに暖房もないし・・・まあこんな部屋にあるわけないか、教室じゃないしね」

「そうだね。でもさ、なんか落ち着かない？ 屋上もすぐそこにあるけどさ、カップルばっかじゃん」

「確かに！ あたしも行こうと思ったけどなんかね・・・」

「そうそう！笑」

この子笑うんだ〜
なんか可愛い」

キンコーンカーンコーン〜

「あつ！もう休み時間終わりじゃん。教室帰ろつ。」

「うん」

「あのさ・・・名前、ともきだったよね？」

「うん」

「じゃあ、ともきって呼んでいい？」

「いいよ。じゃあ夏佳だね？一応先輩だから・・・夏佳先輩！
どう？いい？」

「いいよ。じゃあ決定ね！」

「あつ！俺、教室こつちだから。」

「そつか。じゃあね」

「じゃあね。夏佳先輩！」

そう言つて無邪気な笑顔でわたしに手を振りながら、ともきは1 -
Aの教室に入つていった。

わたしは5時間目の授業中にともきの事を考えていた。

そして気になることが一つあった、それはともきの言ってた「あんまり学校に来てないし・・・」という一言だ。いったいその理由はなんなのか・・・
ともきに聞いていいか悩んだ・・・
あまり知られたくないことだから自分からは言わなかったのかも
しれない・・・
でも、知りたい。
もう少しともきと仲良くなったら聞いてみよう。

次の日

今日も午前中の授業を終えてあの部屋に行った今日もそこには、ともきがいた。

「ともき」

「あつ！夏佳先輩。今日も来てくれるなんて思ってなかった。俺は毎日いるけどね放課後もたまに」

「そうなんだ〜ともきは皆と校庭で遊んだりしないの？」

「うん・・・遊びたくても無理だしね・・・」

「えっ・・・？」

「あつ・・・それよりさ〜夏佳先輩は皆と遊ばないの？」

「うん。なんか皆とテンションが合わなくて・・・」

「そっかあ。まあ無理して一緒にいる必要ないしね」

「だよね」

「あつ・・・あのさ・・・一つ聞きたいことあるんだけど・・・」

「何？」

「ともきがあんまり学校来れなかったり皆と外で遊べない理由はなに・・・？」

「・・・・・・・・・・」

「ごめん。いきなりこんな事聞いて・・・。べつに言いたくなかったらいいよ。ごめんね」

「べつにいいよ。聞きたい？」

「あつ。うん・・・聞きたい・・・」

「あのね。俺・・・・・・・・持病があつてね・・・心臓病っていうんだけど・・・名前ぐらいは聞いた事あるよね？」

「うん・・・」

「生まれつきなんだけどさ。だから激しい運動とかは禁止で・・・。病院行くことも多いしたまに発作とか起こして入院とかしてたんだ・・・。だからあんまり学校来れないし、皆と同じようにも遊べない」

「そうだったんだ・・・。なにも知らずにこんな事聞いちゃってご

めんね」

「ああ。大丈夫だよ。気にしないで。さあ！気を取り直して楽しく行こうよ！お菓子あるからさ」

「本当だー！！あたしこれ食べるー！！」

「じゃあ俺はこれね」

こんな風にして毎日のようにともきと話したりしていた。

「あのさ。俺、明日から2日間は検査で病院行かなきゃいけなくて学校休むからここにこれない」

「そうなんだ……。わかった！寂しいけど我慢するね」

「うん。ごめんね。ありがとう」

「んじゃ教室に戻ろうか！」

「そうだね」

またいつもの場所でお別れだ。

「じゃあね」

「バイバイ」

あゝ

明日から二日間昼休みは何しようかな

たまには校庭に行つて遊ぼうかな

次の日

午前中の授業は眠くてダメだゝ
つてゆうかともきがないなんてつまらなすぎる。

昼休み

ああああゝ

ともきいないんだゝ

カップルばかりだけど屋上行つてみよう！

屋上

「わぁー」

この屋上つてこんなに眺めよかつたんだー
ともきにも見せてあげたいなゝ
学校来たら連れて来なきゃ！！

2日後

今日はともきが学校に来る日だー！！
楽しみゝ。

もう早く屋上の眺めを見せたくて授業にならなかった。

昼休み

早くあの部屋に行つてとみに会いたくて階段を駆け上がった
そして、あの部屋にの扉を開けるとそこには普段とかわらず、とも
きがいた

「おう！久しぶり」

「久しぶり。あのさ屋上出ない？すつごく眺めいいんだよ！」

「いいけど・・・あそこカップルしかいなくて気まずくない？」

「何も知らない人から見たらあたし達カップルにしか見えないよ！
！」

あたし・・・何言つてんだろ・・・

自分で言いながらなぜか恥ずかしかった
でもともきは笑顔で言ってくれた

「そうだね。行こつかあ！」

「うん！」

屋上

「わあー。ずげー。こんな学校からこんなにいい景色が見えるんだ
！」

「でしょ！キレイだよね」

「天気いいから富士山見えるね」

「うん。最高だ」

「あつ。そろそろなか入らない？寒くなっちゃって」

「ああ！いいよ。あの部屋行こう」

「うん」

部屋

「なんかさこの部屋って落ち着くよね。べつにこの部屋キレイでもないし薄暗いし」

「だよね。でも、なんか夏佳先輩が来るようになってからこの部屋なんか明るくなった」

「そうかな。わかんない」

「絶対そうだよ！」

「そっかあ。ありがとう」

「ううん。俺もさ、実は夏佳先輩が来るまで毎日つまなくてつまなくてしかたなかった、夏佳先輩という時が一番幸せだよ」

「ありがとう。なんか恥ずかしいじゃん」

ってゆうか、ともきと顔近っ！！

なぜか目を見るのが恥ずかしくて下を向いてしまった
でも、ともきの顔がどんどん近くなってくるのがわかった
顔を上げてみた

ともきの顔が目の前にあつた

その瞬間、唇に何か暖かいものが触れた

えっ？

これってキスだ・・・

ともきの唇はまだわたしの唇に触れている

軽く触れているだけなのになぜか心に重みを感じた

そして、ともきは唇を離しわたしの顔を見た

きつとわたしの顔は真っ赤だろう

すると、ともきが軽く微笑んだ

わたしは気づいた

ともきに恋してる・・・

そこでチャイムが鳴りわたし達はいつものようにそれぞれの教室に
帰った

それから変わらず毎日ともきと、あの部屋で会ったそして一緒に

話してキスもした

そして、ともきが言ってくれた

「俺・・・夏佳先輩が好きだよ」

「あたしもだよ。キスまでしといて好きじゃないって事はないでしょう」

「だよね。じゃあ俺たち付き合う？」

「うん。いいよ」

こうしてわたしたちは付き合うことになった

そんなある日、今日は友達と遊ぶことになり皆で帰った
歩いている途中に忘れ物に気が付いた皆に「先に帰ってて」言っ
て教室に戻った

忘れ物を取ってからわたしはあの部屋に行った

放課後もいるっていつてたし

わたしはそう思ってあの部屋に向かった

扉を開けるとそこには、ともきがいた

でも様子がおかしい・・・ともきが横たわっている
近づいてみた

すると、ともきは目をつぶって寝てるようだった

「ともき、ともき」

呼んでも起きない・・・

なんで・・・？

わたしは階段を駆け下りて先生を呼んだ
すると何人かの先生が来て

驚いていた

ひろきの横にはくしゃくしゃの紙に読めるか読めないかの字でこう
書いてあった

「夏佳先輩　ありがとう

ともき」

わたしは泣き崩れた

先生が言うには意識がないらしい

救急車を呼んだ、だがなかなか来ない

騒ぎを聞いて駆けつけた野次馬の生徒たちが入ってくるのを教師が
必死にとめていた

ともきの手を触るととても冷たく人間の手とは思えなかった・・・

わたしは手紙とともきの手を握り締めていた

もうどうしていいかわからなかった

しばらくして救急隊が部屋に入ってきた

わたしは部屋の隅に連れてかれ、ともきと救急隊を見ていた
そして救急隊がこう言った

「もうしわけありませんが死後からずいぶん時間がたってしまっ
て・・・残念ですが」

そう言って救急隊が時間を言っていた

もう周りの声など聞こえなかった

死んだ理由は心臓発作らしい・・・

ともきの手を握った

その手を離したくなかった

そして、この部屋でともきと話したことやお菓子を食べたことや屋上で景色を眺めたりキスしたことを思い出した

思い出せば思い出すほど息ができないほど苦しくて悲しくて自分がおかしくなりそうだった

いつそのことこのまま自分も死んでしまおうかと思った

わたしが泣き崩れていると先生がわたしを包み込むように抱きしめてくれた

先生の体は温かくて少し安心できた

でも、涙はいつまでも止まることはなかった

そして、ともきの死体はこの部屋から運び出す時

わたしは苦しくて息ができなかった

もう自分がコントロールできなかった

最後にわたしは、ともきの手をギュツと握った

そして、ともきはこの部屋から運び出された

わたしの手にはともきの冷たい手の感覚と手紙が残った

すると辺りが真っ暗になり何も見えなくなった

そして声が聞こえた

「夏佳先輩、俺だよ、ともき。」

えっ？

「ともきどこ？」

「ここだよ。俺はいつも夏佳先輩のそばにいるよ。だから泣かないで」

「そう言われても泣かないなんて無理だよ」

「俺さ、せっかく夏佳先輩と付き合うことできたから一緒にいるんなどこ行きたかったな〜でも無理みたいだね。今まで本当にありがとう。俺は幸せでした。さようなら。またいつか会おうね」

「まって、ともき。あたしも幸せだった。ありがとう。いつか会おう。待ってるね」

わたしは死ぬ気で涙をこらえて笑顔で言った

目が覚めるとそこは保健室だった

職員室が騒がしいきつと、ともきの事だろう

わたしはもう泣かないことに決めた

ともきがまた会おうって言うてくれたからまたどこかで会えるから泣かない

少ししてから先生が入ってきた

「真島さん大丈夫？」

「はい。大丈夫です。もう泣かないって決めたんで！きつとまた会えるから」

「そう。きつとそうね」

するとまた辺りが暗くなったそして向こうの方から声が聞こえてくる

「夏佳〱夏佳〱早く起きなさいよ！！遅刻するわよー」

んん．．．．

あれ．．．．？

夢．．？？

でも手には、ともきの手の感触に唇の感触も残ってる
手紙を握っていた感じも残ってる

枕も少し濡れてる

泣いてたのかな．．．？

でも、あたしはまだ中1だし

「ほらー今日から中2でしょ！早く起きなさい」

そっかぁ今日から2年生か〱

もしかしたら、ともきに似た子いるかな〱？

いたらきつとそれはともきだ！

絶対に！

昼休みにあの部屋いってみよう！

「ほら起きてー」

「はーい」

そして朝ごはんを食べて身支度して
今から、ともきに会いに行く！

「いつてきまーす」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9532p/>

あの部屋は

2011年1月9日07時46分発行